

P9-341

二分脊椎症の親の会の取り組みを通して

姫路赤十字病院 医療社会事業部 医療社会事業課

○細岡 明喜子、藤本 麻衣、福井 益子

【はじめに】二分脊椎症の親の会（フーランの会）は「脂肪腫タイプの子どもをもつ家族が集まって話ができる場所を院内で提供してもらいたい。子どもたちが大きくなった時子ども同士の話し合う場もあれば良いと思う。」という相談から介入した。親は様々な症状の児が集まる日本二分脊椎症協会が受け入れできず、また会員の児の名前の登録が必要であったため子ども達が意思表示できない段階では入会に抵抗があった。比較的障害の軽い児が多い当院の患者家族だけのフーランの会が平成15年に発足した。

【取り組み内容】会員は現在16人の児の親となっている。本年5月から子どもの就学等で再就職される親が多く平日に集まるのは困難になり2ヶ月に1回日曜日の午前中に開催している。夏休みや冬休みは子ども同士が交流できるようバーベキュー大会やクリスマス会の企画や時に外部の講師を招いて講習会を開催している。医療ソーシャルワーカーは膀胱直腸障害や運動麻痺に伴う身体障害者福祉や各種手当等社会資源についてや小児専門の泌尿器科、整形外科、リハビリテーション科等他医療機関受診について情報提供を行っている。フーランの会運営の相談や子どもとの交流を通して心の声に耳を傾けている。

【考察・課題】二分脊椎症の症状は導尿が必要であったり、運動麻痺があり補装具をつけていたりそれぞれである。「どうして私はこんな身体で生まれてきたの?」「どうしてお姉ちゃんやお母さんと違うの?」「どうしてこんな病気になったの?」と子どもは母親へ投げかけてくる。今後就学、恋愛、就職等ライフサイクルに応じた問題が発生してくるが、それぞれの家族がエンパワメントしていけるよう医師や臨床心理士と連携を図りながらトータルケアを目指し地域社会での成長をサポートしていきたい。

P9-343

特定保健指導の効果

石巻赤十字病院 医療技術部 栄養課¹⁾、石巻赤十字病院 健診課²⁾、石巻赤十字病院 看護部³⁾○佐伯 千春¹⁾、佐々木 亮子¹⁾、奈良坂 佳織¹⁾、
庄司 博美²⁾、奥山 弘子³⁾、堀内 由美³⁾、
三浦 孝子³⁾

【目的】2008年4月より特定健診・特定保健指導が開始となった。当院でも9月より特定保健指導が始まり、初年度は動機付け支援対象者14名、積極的支援対象者20名の計34名について指導を実施した。動機付け支援は基本的に保健師のみ1回の指導であり、積極的支援は、保健師・栄養士が交代で4回の指導を行っている。栄養士の関わりとしては、現在の食生活のチェックと今後の食習慣の見直しである。今回最終支援を終了した者について、保健指導の効果と栄養士としての関わりについて検討したので報告する。

【方法】2008年度保健指導を実施した34名についての指導前後の腹囲・体重の変化の比較を行った。また動機付け支援対象者（以下動機付け群）と積極的支援対象者（以下積極的群）間での1)腹囲2)体重3)食習慣4)運動習慣の4つの項目について比較、検討を行った。

【結果】指導対象者の年齢は51～60歳が全体の70%を占めていた。中断者を除く32名のうち6月1日時点で最終支援を終了した者は動機付け群3名、積極的群12名計15名であった。15名中、腹囲減少者は93%、目標達成者は53.3%であった。体重減少者は86%目標達成者は40%であった。食習慣の改善は93%、運動習慣の改善は80%であった。どの項目についても2群間において有意差はみられなかった。

【考察】動機付け群、積極的群とも対象者の意識が高く、最終支援でも改善が見られた。2009年度は動機付け支援にも栄養士が参加、積極的支援には運動療法士が参加することとなり、更なる内容の充実を図りより効果の出せる指導を行ってきたい。

P9-342

健診部門の経営管理ならびに施設拡張にむけた市場分析

諏訪赤十字病院 検診部¹⁾、諏訪赤十字病院 事務部²⁾○百瀬 博史¹⁾、渡辺 秀彦¹⁾、平出 一¹⁾、増澤 正裕²⁾

当院の健診センターは、同施設内で10年に渡り、健診業務を行ってきた。その間、受け入れ施設などについては大幅な改修がなされていないため、健診待ち時間が長いことや人気健診コースの受け入れ枠拡大ができないこと、さらに予約時のストレスなどの問題が浮上し今日に至っている。今回受診者の需要にあった適切な施設の見直しを図るとともに、施設の増強を検討することによってこれらの諸問題を解決し、サービスの向上と収益性の高い運営体制を構築していくものとする。また新鋭機器・装置の増強・更新、迅速な事務処理、院内の他の診療施設とのシームレスな運営を実現することにより、健診の更なる精度向上を目指すものとする。同時に営業活動を多面的に展開し、新規需要を掘り起こし、再診率の向上を促進させるものとする。そのために今回の改修目標、つまりどの設備をどの程度改修するかを設定するに当たり、当院健診センターを取り巻く環境を含め、以下の調査を実施した。1.健診受診者の1999年からの増加率、再検査が必要な受診者の割合（全国値との比較）などの統計調査2.諏訪地域の年齢別人口の推移などの統計調査3.長野県の受診対象者にしめる受診者の割合、受診しない理由などの調査4.「協会けんぽ」および「健保」が組織されている企業の動向調査5.周辺地域の他施設の動向調査6.他施設との差別化および受診促進策7.健診への意識調査（最近のアンケートの結果から）これらの調査結果から改修の方向性に優先順位をつけ、対象受診者をより鮮明にすることにより、健診施設の改修プランを立案するものとする。このプランにより当院の健診センターの予約待ち時間の解消、人気コースの受診者枠の増員、受診者の満足度・サービス向上のための環境づくりなどを実現する。

P9-344

糖尿病食バイキングを試みて

広島赤十字・原爆病院 栄養課¹⁾、広島赤十字・原爆病院 3号館2階病棟²⁾、広島赤十字・原爆病院 第5内科（内分泌・代謝科）³⁾○山根 那由可¹⁾、丹生 希代美¹⁾、古田 小百合¹⁾、
平川 香奈¹⁾、河崎 郁恵¹⁾、倉田 史子¹⁾、吉田 勝美¹⁾、
橋本 智聡¹⁾、上瀬 達也¹⁾、山本 節子²⁾、澤野 文夫³⁾

【背景】近年我が国の糖尿病の増加は、癌とともに死因の上位を占める動脈硬化性疾患の基礎疾患として憂慮されている。糖尿病の食事療法は運動療法とともに最も重要な基礎治療であるが、入院中は実行できても退院後の維持が難しいことがこの疾患に特徴的問題である。

【目的】バイキング形式の食品選びの実習を入院中に行なうことで、退院後の食事療法継続の一助をなすかを検討する。

【対象】糖尿病専門病棟で入院治療中の患者15名（男6名、女9名；1型糖尿病1名、2型糖尿病14名）

【方法】教材として、A3用紙に主食・主菜・副菜・デザート皿の形と、患者個々の指示単位を記入したランチョンマットを配布し、表3で構成された主菜を6種類の中から選択させ、御飯（表1）は患者自身に計量させた。サラダ（表6）と果物（表2）は管理栄養士が配膳した。選んだ食事は撮影し、終了後、単位配分表と共に患者へフィードバックした。主菜選択理由、秤の使用状況等の項目について、アンケート調査した。

【結果】女性は、男性よりも計量がスムーズで、日頃から食事への関心が高いことがうかがわれ、秤の使用状況でも男性33%に対して女性67%と高値を示した。皆、積極的に喜んで参加され、アンケートでは15名全員から「勉強になった」と回答を得た。

【考察】今回、栄養課スタッフが病棟に向いたことは、病棟スタッフや患者との連携を強化することができ、より上質な指導を可能としたと思われる。今後も定期的に、本試行のような実践的な栄養教育を行うことで、患者の自己管理の意識を高め、退院後の食事療法継続に寄与していきたいと考える。